鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 11 月 6 日）

八佾第三

1　孔子 季氏を謂う。八佾 庭に舞わす。
是をも忍ぶべくんば、孰れをか忍ぶべからざらんと。

孔子が季氏について非難をした文章と捉えると良いでしょう。

ちなみに季氏は、三桓（季孫・叔孫・孟孫）と言って、日本でいえば家老職にある人達が主君をないがしろにして自分たちの力を強めて、主君を主君と思わず、自分達が我が世の天下というような振る舞いをしていました。時代背景で言うと、季氏は 5 代目の季平氏ですが、その当時の主君は昭公という人で、かなり増長した三家老の三家（三桓）を殺そうとしたけれども失敗し、自分は追われて斉国に亡命したという状況の時です。ですから非常に増長しているわけで、孔子が非難をしたわけです。

八佾の舞とは、8 列×8 人の合計 64 人の舞妓が踊りを踊る、天子しか見ることのできない素晴らしい踊りです。その次の諸侯になると、6 列×8 人で 48 名、その次の大夫(陪臣)になると 4 列×8 人で 32 名です。季氏は陪臣ですから、32 名の舞であれば分相応なのですが、自分の主君と同じ 64 人の舞を躍らせたので、君主気取りで増長も限界を超しているというように孔子は思っているわけです。

このように増長している人間を我慢して見ているという事は、天下に我慢できないものは何もないではないか。このようなことをする増長した人間は、自分の両親や君子を平気で殺しかねない人間だ。これは大変な者だということで、相当強烈に孔子は季氏を批判しています。

2　三家の者、雍を以て徹す。子曰く、相くるは維れ辟公、天子穆穆たりと。
奚ぞ三家の堂に取らんと。

三家とは、先ほど申しました三桓（孟孫・叔孫・季孫）という三つの家系です。

それぞれ三桓の人達が祭りごとを行なう時に、そこに参加する人達は皆、無知な人間が多くなった。

雍という音楽は、天子が中心になってする祭祀で、供物を下げる時に演奏する音楽です。
そういう決まりがあるにもかかわらず、陪臣（家老）が主君と同じ音楽を演奏するとは、とんでもないことだ。
孔子が言うには、「その祭祀をする時には、諸侯は天子を助けて実行する。その時は天子が自ら祭祀を司る敬虔な様子である。深遠な非常に厳かな雰囲氣が出るけれども、どうして天子しか出来ないような重要な祭祀を、それぞれの三家の家老の廟堂でやるのか。それは天下の恥さらしではないか。」
前の章と同じく、孔子が三桓に対して批判をしている文章です。

3　子曰く、人にして仁ならずんば、礼を如何にせん。
人にして仁ならずんば、楽を如何にせん。

人間として欠けている者が、礼を習って何になるのだ。人間として欠けている者が、色々な理屈を知って、音楽を上手にこなしたとしても、基本が欠けていたのでは何にもならない。
基本が肝心だということです。

論語については、何度も申しますが、現代の状況と比べ合わせるのが面白いところです。
これを見ると、今の日本はここまで酷くはないと思います。皇室をないがしろにするような事例は見当たりませんし、天皇陛下や皇后陛下を貶めるような言動をして、それが世の中に罷り通っているという事は、今の日本ではありません。ですから中国のこの時代と比べると、はるかに良いなと思います。
八佾の舞の文章で表現されている、増長して鼻持ちならない人間が世の中を牛耳っているというのを考えてみた時に、鳩山首相はどうでしょうか？　ちょっと頭が低いから、増長しているというのは当てはまりません。むしろ小沢幹事長の方が増長しているように見えます。マンションをあちらこちらに置いて、休息の為だと言っていますが、そこに女性がいるかいないかは話題になりませんし、それをどのように手に入れたかについても話が出ません。
今の時代で考えれば、天下りを見た時に、民主党のメスの入れ方はとても生ぬるいと感じます。例えば、雇用開発協会ですが、ハローワークの所長さんたちが皆、ここに天下っ

て、何も仕事をしないで高給を貰っている。天下りに関してメスを入れだしたら、小さな、増長している連中がぞろぞろと出てくるだろうと思います。仙谷さんの行政刷新会議が機能してくれると非常に日本は良くなると思うのですが、なかなか進みが悪そうです。とても中まで詰めることは出来ないだろうと感じます。

以上で本日の解説を終りに致します。有難うございました。